第73回 美術史学会 全国大会
12月12日(土) 分科会A(日本・東洋) A-3 12:50-13:30

中国・宋時代の挿花文化における花器について

李 含(学習院大学)

中国・宋時代における挿花文化は、これまで概ね通史的な研究の中で言及されてきた。しかしながらその研究の対象は、主に挿花の種類などに集中し、花瓶に関する議論はきわめて限られてきたといってもいいだろう。そこで、むしろ陶磁製の花器などに関心を寄せる発表者は、挿花文化における花瓶に注目し研究を進めてきた。その手法としては、第一に挿花に関する宋時代の文献資料をなるべく多岐にわたり再検討し、そこから花器に関する記述を収集すること。第二に同時代の貴族墓からの出土した遺物、あるいは伝世品として残された作品などから、文献資料に記された花瓶に近しいと判断された作例を集めること。第三に同時代の絵画資料を通して、挿花儀礼などのなかで花瓶が実際に使用されている場面を抽出することである。本発表では以上のような作業を通じて、得ることのできた宋時代の花瓶に関する新知見を提示するものである。

宋時代の挿花文化は、唐の華やかで大型の花を挿すスタイルを継承する一方、禅宗思想と融合した性理学を唱える儒教と相まって、個々人の心情をより一層重視し、社会各階層の日常生活に取り入れられていった。とくに宮中の挿花は威厳と儀礼を象徴し、南宋末期の士大夫周密が『乾淳起居注』という著作の中で、禁裏に用いられた花と花器の種類及び設えに関する細かな記録を残している。また、宮廷に限らず、都市を中心とする公共生活において、宴会用の挿花は「四司六局」という専門職に司られていた。その役割に関しては南宋時代の『夢粱録』や『都城紀勝』などの書物に記載されている。一方、文人階層にとっての挿花は、個人の審美眼と美意識を表すものであった。知識層は花を愛でながら、同時に花器の鑑賞も楽しんでいた。

とくに宋代の陶磁器生産の技術の向上に伴い、観賞性を高めた器が徐々に富裕層などに受容され、調度品として室内飾りの重要なアイテムとなっていく。陶磁器は、唐時代の金属器やガラス器をモデルにしながら形を写し、独自の造形的特徴も加えて豊かに展開していく。宋時代に生まれた器形の多くは、後世にも受け継がれていくのである。また、陶磁器以外にも、従来の金属器を始め、ガラス器、竹材などの器も広く使用されていくようになる。とくに花瓶の器形に関しては、中国古来からの伝統的な器形と、西域など海外からもたらされた新しい器形とが併存する状況を指摘したい。

さらに、宋時代の挿花文化が、日本へも影響を及ぼした状況にも触れてみたい。日本では、平安時代の文学作品から「花瓶」という語彙が既に見られる。10 世紀の『枕草子』には、「おほきなる瓶」に桜を挿す、という文言がある。また、『源氏物語』の中に書かれた様々な草花、とくに秋草に対する強い興味は、ちょうど同時代の中国における山野の花に対する評価の変化を想起させる。両者の間の関連及び影響を合わせて探ってみたいと思う。